

異素材を組み合わせた オリジナルの鞆を作る

中池見湿地からほど近い住宅地に工房を構える「FISK」。
店舗機能は有しておらず、看板も出ていないが、
全国にファンを持つ、知る人ぞ知るハンドメイドバッグのブランドだ。
オーナー兼クラフトマンの奥井彰さんに話を聞いた。

20代で世界を巡るなど ユニークな経歴を持つ

アトリエ「FISK」の設立は1996年。前年の阪神・淡路大震災からの復興半ばにあった神戸市においてだった。当時、奥井さんは54歳。鞆メーカーなどの修業を経ての独立かと思えば、そんな予想は見事にくつがえされる。

敦賀高校を卒業後、同志社大学法学部に進んだ。デザイン事務所に入社し、グラフィックデザイナーとしての一歩を踏み出すが、人形劇団の制作部員へと転職。アメリカで本格的にデザインを勉強したいとの思いから、その費用を稼ぐためだったという。1967年、旅費分が貯まると、横浜港から貨客船で海を渡った。

「1ドル360円の時代で、ア

メリカは時給も良く、カリフォルニアの農園で働いていました。とにかく働いて、やっとお金が貯まり、デザイン学校の願書を取り寄せた矢先、不法就労で国外退去処分。それで人生が変わってしまった」と笑う。

夢叶わず、アメリカを出国して以降、奥井さんは世界30カ国余りを巡り、1975年に帰国。デンマークで起ち上げたキャンドル工房の成功を踏まえ、京都で開くも失敗する。その後はエスニック雑貨やアメリカン雑貨のバイヤーとなり、世界各地で買い付けを行っていた。バイヤーとしての力量は高く、40店舗分の雑貨仕入れを任されるなど、多忙な日々を送っていた。1994年にバイヤーを辞め、独立を決意する。

「当初は家具職人になろうとし

たのですが、その頃は家具がブームで、家具職人の養成所への入学希望者も多かった。試験に落ちてしまい、最後は長年の趣味だったレザークラフトに落ち着いたわけです。昔から自分が使うバッグはすべて自作していました。好きなバッグを探しても見つからなかったで、ずっと趣味として作り続けていたのです。今振り返っても、結果的にはそれで良かったのだと思います」



工房奥には、奥井さんが収集したキリムや草ビロード、酒袋などの布類が多数保管されている。日本酒を搾る際に使う酒袋も、現在は機械絞りがほとんどで酒袋自体が使われていないため非常に珍しい



■Profile

奥井彰さん。1942年敦賀市生まれ。海外放浪は、小田実の「何でも見てやろう」や、五木寛之の「青年は荒野をめざす」などに強く影響を受けてのこと。79歳の現在も、そんな好奇心と行動力に溢れていた若い頃の輝きは失っておらず、日々鞆と向き合っている。アトリエ名の「FISK」はデンマーク語で「FISH（魚）」の意味。敦賀に移転後は、中池見を多くの人に知ってもらおうと「FISK」の後に「中池見」を加えた

技法はまったくの我流 唯一無二のバッグたち

鞆職人の道を歩み始めた奥井さんだったが、趣味を本職にただけで、専門教育や修業の経験はない。技術を磨いてきた職人に対抗しうる強みは何か、自身に問いかけた。

「世界を放浪している間、各地の革細工の工房を訪れて、どんな風にするのか見て回っていました。そこで得た経験が役立つのではと、我流ながらも他の職人とは差別化を図った、オリジナルのバッグを目指しました。すべて手作りの一点物です」

「FISK」のバッグの大きな特徴が、異素材の組み合わせだ。約100年前の酒袋、中近東に住む遊牧民が織るキリム、コンゴの少数民族の手による草ビロードな



上) 彩里さん手作りのアクセサリ。創作時に石たちを配置する際の着想について「その時の気分で並べているうち、石同士が話をつけてくれるのです」と語る 下) 奥井彰さんを挟んで、向かって右に奥様の彩里さん、左に藤野花さん

ど、世界中から集めた貴重な布と、本草のコラボレーションが目を引き。つい先頃、越前和紙を使ってほしいとの依頼で、透明ニスを用いて耐水性の工夫を凝らしたバッグを仕上げた。個性的な素材の組み合わせやデザインのファンは多い。その特徴から、旅先で互いのバッグが「FISK」と気づき、意気投合したという愛用者のエピソードもあるくらいだ。

「なるべく金属パーツを使わず、たとえば留め具には木の実や貝、石などの素材を使用することにもこだわっています。内側に革を使用しているのも特徴ですね」

丁寧に良い鞆を作り続けて 地元の人にも魅力を感じたい

2011年、奥井さんは生まれ故郷の敦賀市へアトリエを移転した。自然豊かな田舎にアトリエを

置きたくなったそうで、中池見湿地近くに物件が見つかった。「50年ぶりに戻ったのですが、実はこの年（70歳）になるまで、敦賀にこんな素晴らしいところ（中池見）があるなんて知りませんでした。こちらに来て10年、中池見湿地保全委員会の会員として活動に参加しています」

中池見湿地を縁に、奥井さんのアトリエへ通う女性がいる。大学卒業後に京都の鞆屋で修理や縫製などの技術を学び、自らのレザークラフトのブランドを現在立ち上げようという藤野花さん。幼い頃から中池見の保全活動に携わっていて、奥井さんと知り合った。

「海外の空気感や独学ならではの発想など、私のように技術を習ってきた者にはない部分を吸収できればと思っています。学ぶべきことは多いです」

アトリエ「FISK」は、全国のデパートやギャラリーで展示会を開いてきた。展示会では奥井さんの鞆、彩里さんの作るアクセサリも並ぶ。今では入手困難な各国のパワーストーンやローマングラス（古代ガラス）などを使った魅力的な作品ばかりだ。

奥井さんは「これまで全国を飛び回ってきましたが、今後は福井のお客様と繋がっていきたい。オーダーや見学は気軽に連絡してほしい」と話す。アトリエ寄りの作品制作にも意欲を見せ、奥井さんの鞆作りの旅はまだ続く。



奥井さんには珍しく、牛革のみで作ったリュック。麻糸の蠟引き糸で手縫いしてある

2つのバッグを背中合わせに縫い合わせたWポケットショルダーで、越前和紙と牛革の組み合わせが斬新な作品

110年前の酒袋を素材に作ったトートバッグ。柿渋と酒が生み出した淡い茶褐色が味わい深い。丹波木綿の古布で裏張りしている

Information

アトリエ「FISK」中池見
敦賀市藤ヶ丘21-6
電話0770-21-2199
<http://www.fisk-nakaikemi.com>
※革の手縫い教室を開催
初心者や手作りの好きな人を対象に、定員4名までの少人数制で、牛革のA4トートバッグ作りを体験する。詳細や申し込みは電話を。



19世紀のイギリスのデザイナー、ウィリアム・モリスの布を使ったトートバッグ。シックで華やかなモリスデザインを生かして仕上げた



キリムを使った蓋付きトートバッグ。キリムとは、主に中近東に住んでいる遊牧民による平織りの布で、テントや敷物、袋などの生活道具に使われていた。独特の文様（色やデザイン）が世界で注目されている